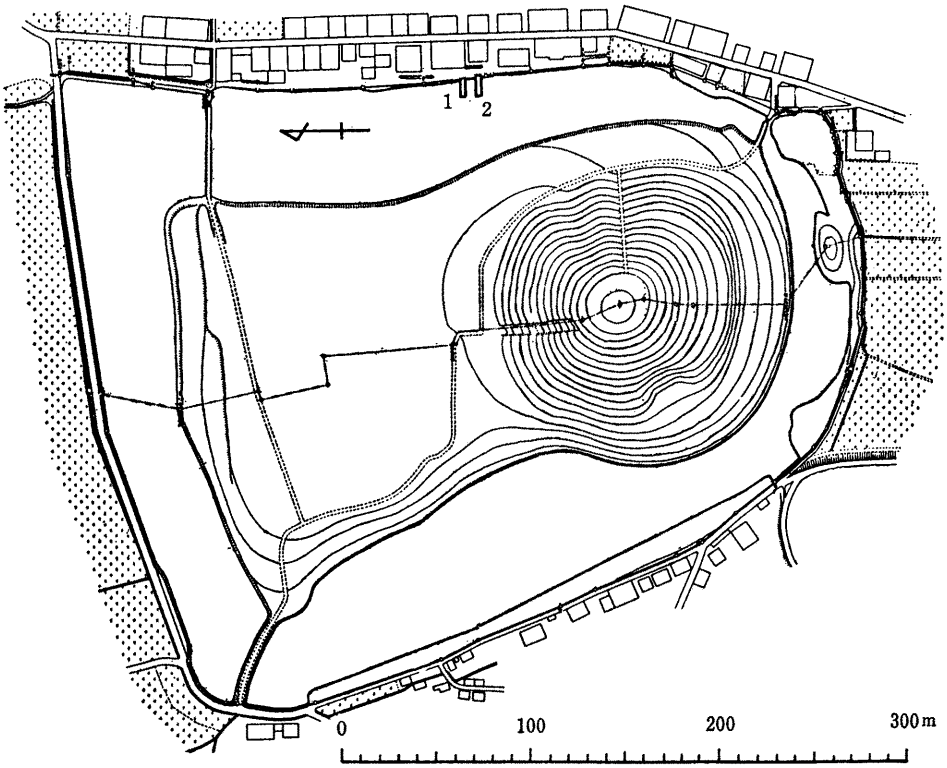
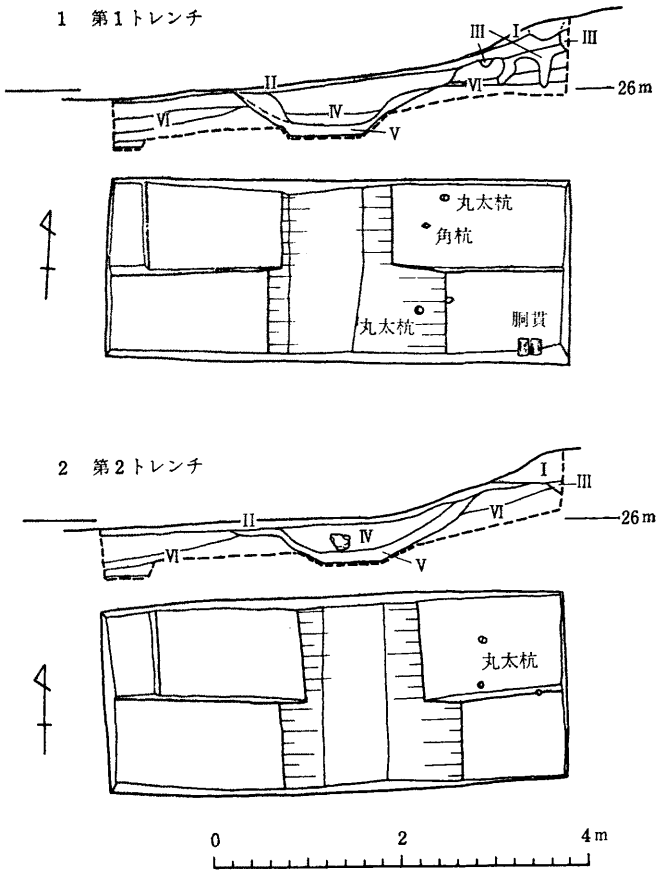
河内大塚陵墓参考地外堤護岸工事区域の調査

大塚陵墓参考地は、東除川の西方、羽曳野市と松原市の境界沿にほぼ主軸をすえる前方後円墳である。古市古墳群の中心からやや西に偏した位置にある。墳丘の長さは三〇〇メートルを越え、全国でも有数の規模を誇る。前方部は、昭和初期まで民家が立地していた関係もあって、かなり削平されているが、一部には家の周囲の小土堤や垣根、さらには畑地の痕跡をとどめているところもある。後円部は比較的均整な形状を残している。そのほぼ南面にあたる部分の中腹には、「ごぼ石」・「牛石」と称する巨石が露出している。本墳においては、墳丘内の巡回路で時折、赤褐色の小さな土塊を採集することができる。全体に脆弱で詳細は判然としないが、浜田耕作氏の「埴輪の破片各部に散乱す」(註)という報告文と合わせ、注目される。今回の調査においては、東側くびれ部の墳裾付近で突帯のある埴輪片（第26図1）を採集している。

調査は外堤護岸工事に先立って、昭和六十一年十月十九日～二十二日に行った。また、同年十二月二十二日～翌年一月十九日までの工期中、掘削時には立会調査を実施した。調査箇所は、東側外堤内法のほぼ中央、界13号と14号の間にあたる（第24図）。この付近の外堤内法は、すでに昭和四十一年度に護岸工事がなされていたが、



第24図　大塚陵墓参考地調査箇所の位置（1/4000）



第25図　大塚陵墓参考地トレンチ平面および断面（1/80）

該所（延長一五メートル）は未施工のまま、現在に至ったものである。現地は、東から西へ緩やかな傾斜を呈しており、瓦礫が散乱していた。

事前調査は施工区域の両端に、長さ五メートル、幅二メートルのトレンチを2本（北側を第1、南側を第2トレンチとした）設けて、実施した。

両トレンチとも層序は酷似していた（第25図）。つまり、外堤寄りの部分は攪乱をこうむっていた（Ⅲ層）ものの、周濠の堆積土（Ⅱ層）の下位に地山（Ⅵ層）が認められた。Ⅱ層は黄褐色の粗砂層で、瓦礫や陶磁器の破片が含まれていた。Ⅵ層は黄灰色粘質土が主体を占め、外堤から濠側にかけて緩傾斜を示していた。外堤の肩は、さらに東側へと続くようである。

外堤寄りの部分で、木杭が残存しているのが認められた。胴貫の遺存と合わせ、土留柵として用いられたものであろう。また、両トレンチともに、そのほぼ中央で外堤に並行する幅約二メートル、深さ約〇・五メートルの溝が認められた。この溝の周囲は青灰色に変色していた（Ⅴ層）。溝は二層に区分できるところもあるが、基本的には黒色土層一層（Ⅳ層）から成っている。近現代の陶器片やガラス片などが検出された。この溝は関係者の談によると、近年（昭和初期）まで使用されていた水路という。本墳の濠は渡り土堤によって、北池（前方部側）、西池（松原市側）、東池（羽曳野市側）に分けられている。このうち、北池の水位が低いため、北東部の水田に水を供するにあたって、西池・東池の水が利用されたものである。つまり、灌漑用の水路として近年まで機能していたものと言われている。

工事は、既設の石積間を接続するかたちで行われた。その間、立会調

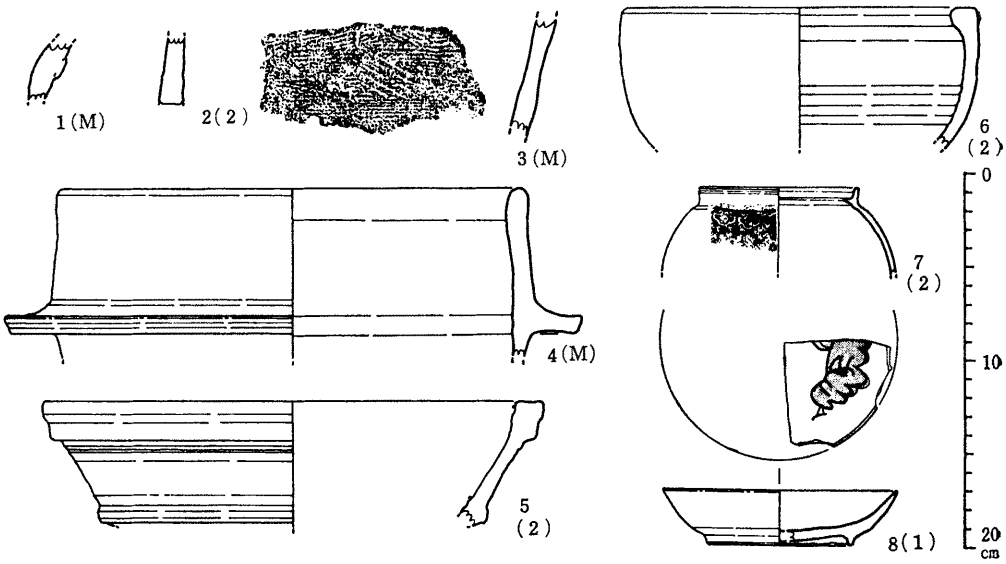
査を実施したが、事前調査時と同じく、後世の堆積層と地山を認めた。それ以外に、第2トレンチのすぐ北方で、外堤に沿った掘削壁面に上端の幅三・六メートル、深さ一・七メートルの落ち込みが検出された。出土品がないこともあり、その性格は不明である。

工事は予定通り施工した。

遺物は、事前調査時のトレンチからの出土品一〇点、外堤内法や墳丘裾からの採集品一四点、併せて二四点である。そのほとんどは炻器や陶器であり、一部に土師質土器、瓦、埴輪を含んでいる。なお、出土品の一部に関して楢崎彰一、白石太一郎、川西宏幸各氏に教示を賜ったところがある。

埴輪（第26図1）　乳褐色を呈する土師質の製品である。大きく外反することから、朝顔形の頸部にあたると思われる。突帯は、現状では低平な断面を呈しているが、全体に磨耗が著しいことから、本来の形状は不明である。

土師質土器（2～4）　2は淡い灰褐色の堅緻な焼成を示し、炻器様にも見える。下端は凹凸があるが、底面の可能性が高い。磨耗が著しいが、内面の上方には横撫でが認められる。3も2と同様な焼成を示す。外面は凹凸が激しく、その境も比較的明らかであることから、叩きかとも思われる。仕上げは撫でである。内面には横方向を中心とした刷毛目が認められる。4の羽釜は口径四九センチに復元できる。口縁端部は丸く仕上げている。これも磨耗度が強い。



第26図　大塚陵墓参考地の出土品（1/4）
（　）内は出土地点を示す，M：墳丘裾

炻器（5～7）　5は暗灰褐色を呈する硬質の製品である。内面は一枚剝離したような状態となっている。下端部に刳り込みと思われる部分があることから、火鉢であろうか。6は口縁部を内側に丸く肥厚させた製品で、体部は丸味を有している。盌、もしくは鉢であろう。横撫でを中心に仕上げている。7は内側にかえりをもつ薄手の土瓶である。肩の部分に押印が認められるが、その一部は撫で消されており、把手の接続部分にあたるのであろう。

磁器（8）　伊万里系の皿である。内面は平滑に仕上げられているが、外面の体部には凹凸があり、釉の厚さが一定しない。内面見込み部分にダークブルーの植物文様が認められる。

（註）浜田耕作「南河内地方に於ける石器時代遺跡と古墳」『東京人類学会雑誌』一七四、一九〇〇年

（福尾正彦）